

5
1967



晴もくやと雲のくくりふくは
いほくはははははははははははは
之ほはははははははははははは
かちんはははははははははははは

クハ
マハ
ハハ

麻の島の月くくはははははは

ハハ

月村や一橋の雲のくくはははは
我娘をささくしお月く麻島は
雲のほも月くはははははははは

ハハ
ハハ
ハハ
ハハ

月村をささくしお月く麻島は
月くはははははははははははは
月くはははははははははははは

きりくくの月くくはははははは

舟の向きの麻島ははははははは
月くはははははははははははは
旅ははははははははははははは
お國橋をささくしお月く麻島は
月くはははははははははははは

渡くく月の水ははははははは
はははははははははははは
はははははははははははは

市川の所國所をささくしお月く麻島は

今も猶も山をさるる父子村末お望里の民家のや柳の
共未耐らしたた山を人此男平のよ七夏時神が加友
た馬元父子をむせり仰る居位徳守父子は久行賢と
多又遊ばるるをゆ又千々全時討ねるは田舎徳と二子亦
自願ふをさうして居たり

月一冬く形じら夫の冬はさうかきつた田舎の家
系はいさうと多れは居るを安西居るさうりして居るを
よせしとた人との結しつた入るさうりして居るを
さうりして居るさうりして居るをさうりして居るを
一列を打たさうりして居るをさうりして居るを

おまゝ

平 柳や 賣入るさうりして居るを 柳 八

秋 風や すまきの又入るさうりして居るを

日蓮宗と真如の法流とく論をさうりして居るを
所謂さうりして居るをさうりして居るを
柳あり外の樹よりさうりして居るを

又おれありと二子とさうりして居るを 柳
竹もほとさうりして居るをさうりして居るを

山門のろ沿をりて松橋あり
中を渡るも中絶橋
の原をりて例と碑あり

繼橋 繼絶興廢維文維橋
詞林千歳萬葉不凋

と云ふ、つ川一のよの海見ゆいそりり
よとの絶橋のゆいそり

松橋や今と尾の波と絶れ 柳
千兒素大明神をぬる

と云ふのよこさしきるや井のしるい 全

真間井 瓶甕可汲同志何願
嗚呼節婦與水列清

よとの井や 教社を
し若畑の 全
又卷川ハ絶橋の流サリ

一の流りて流や又卷川 全

萬葉才三過勝麻真間娘子墓
山部省祢赤
古昔有家武人之倭父幡乃帶解替而盧屋
立妻問為家武勝牡鹿乃真間之千兒名

之奥柳乎此間登波聞柳真木之葉哉茂
有良武松之根也遠久寸言耳毛名耳毛吾
者不所忘

反歌

吾毛見都人尔毛將告勝牡席之間之能乎

兒名之奥津城處

万葉才九詠勝席真間娘子高橋蟲磨

勝鹿之真間之井見者立平之水掬家年乎

兒名之取思

舊深自人々一信四の海は長く又三河の邊
心是始一信のつれえれさのりのあを
人の中へ入るんふととあはれと云

ツルもややあへくはくしゆと云 柳

い所はさし信のあふれ有ととと里人之羽は
牛飼も好くやあまの奴を今 ちり

心信よりかあや二里の一日をらりて信は
かへるるのこころをいふと云

三月娘一若も麻呂のあはれ 柳

武蔵の鬮く初冠の船一舟を舟て船板をた
まの船板より一水ううりぬせき、酒度よき飲よ
けのあーくわの 大倉を舟入とてあーくわ
しつ月よーくわーくわーくわーくわーくわ
の海く船をよせーくわーくわ

ゆきよーの船十舟にちりあひ

あーくわーくわーくわーくわーくわ

初書くまを舟板よりあーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

船一舟をよせーくわーくわーくわーくわ

一 水斗一夜の以丘尼二人、其合麻の味
は漆をこして贈を押し辛うとて麻の味
とて細田を死し、今この麻をよめ、
鐵をこき入る、
ち何しりて谷を走る、

十六夜やや、
とていひや、
七の雨降り、
神く神降り、

赤い洞の流し、
かきと、
神の音、
法後の流、
ま、
ゆ、

長二尺余、
長三尺、
ま、
ゆ、

この向う、
ゆ、
ゆ、
ゆ、
ゆ、
ゆ、

長
全

東海にちうく波をくまへりてはるくして海島を
しむ縁にちうくをくハ目りねるくは海島に
ねをちうくくちとちりてをゆんとして
ねをちうくくちとちりてをゆんとして
ねをちうくくちとちりてをゆんとして

鹿嶋社祭神武甕槌也

日本記曰伊特諾尊按所帶十握斬軒遇突
智其劔鐔垂血激越為神号云甕速日神次
燖速日神其甕速日神是武甕槌神祖也

御齋宮

今年にちうくは御齋宮にちうくは御齋宮に
今年にちうくは御齋宮にちうくは御齋宮に
今年にちうくは御齋宮にちうくは御齋宮に

常陸帯

神夏每年正月十四日七月七日虫二に也

天降甕

御齋宮中有水糶ヲ入テ酒ヲ造神酒備

慶長七年撰奥名御齋宮の御齋宮

えねの御齋宮の御齋宮の御齋宮

御齋宮の御齋宮の御齋宮の御齋宮
御齋宮の御齋宮の御齋宮の御齋宮
御齋宮の御齋宮の御齋宮の御齋宮

長銘

土流のまじりて平伝ア

いさよひやまの籠りて深とり

柳ル

秋のまじりて中とらるる

伎平

平持の列年しとま履のまじり

平持

まじりて平のまじりて

平持

いさよひやまの籠りて深とり

平持

山まじりて中とらるる

平持

此流のまじりて平伝ア

平持

ちまの籠りて中とらるる

平持

秋のまじりて中とらるる

平持

まじりて平のまじりて

平持

まじりて平のまじりて

平持

いさよひやまの籠りて深とり

平持

秋のまじりて中とらるる

平持

山まじりて中とらるる

平持

此流のまじりて平伝ア

平持

いさよひやまの籠りて深とり

平持

成邦と名の如く雅き

けりしひのほのらりしゆき

片後の所しりりしゆき有る如

きとも同きしゆきとらるる如

卯除の終後りしゆきとらるる如

お八のんのりしゆきとらるる如

卯と終を佛と納りしゆき

けりしゆきとらるる如

卯除の所しゆきとらるる如

一卯の終後りしゆきとらるる如

卯と終を佛と納りしゆき

けりしゆきとらるる如

又八の月ありしゆきとらるる如

けりしゆきとらるる如

くともさく成て大終を納り

けりしゆきとらるる如

下終の終りしゆきとらるる如

けりしゆきとらるる如

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

卯

ふしよきまのつげ〜ゆき〜雪の下
波のそよぎ〜〜〜こも

雨 辛

ふしよき

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき〜ゆき

雪 辛

ふしよ

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

柳 辛

ふしよ

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

雪 辛

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

柳 辛

ふしよ

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

雪 辛

十八日東流石の書院あまの宮あまの宮

ふしよ

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

柳 辛

ふしよ〜ゆき〜ゆき〜ゆき

雪 辛

をいしつひはうと濁せし

柳凡

押入を掃もじつちうま

栗川

睡ふきし経時ゆわのちり

四筆堂

いつらうとては終 じつ

辛

名食を根の海しをきく

多

石江泊の控し初 免

凡

のきこしつと酒田とのかり

川

さうらうと終を繰り入

石

とけけとをいしつと

辛

ふるしつれしつと

川

日まうとつと

凡

年し者ちとのし年のみ

辛

福うけしつと

五

こつとつと

凡

九折を

川

願うつを

五

字のまうと

辛

酒まうと

川

思ひ今守く脚人經るに
歌おととろれと悟祈

几 守 為 儿 川 半 多

湯治場の幕中くちまじり

巾衣裾と暮衣らへ
みそきりぬゆの牛のい

髪をひくくぬく白く

衣うきく音の波あ

何よりしほれ物のをを

けく痛めはるくあはる

乳をきくとはく

いほくく細くつる

指之筋の廊下あ

唐傳のき板打ハ

山をゆくく

元のころこの漬から

地のきくは

柳ルをくしるる物とあはる

きくへ

あはる

柳 几 半 多

月夜の川流のうららかな水
小橋をえさむ心路や此のうら

目くらましの鐘の音をえさむ
年を離れぬ鐘の音をえさむ

設計の白波のうららかな水
波のうららかな水

鳥の飛ぶや砂子のうららかな水
鳥の飛ぶや砂子のうららかな水

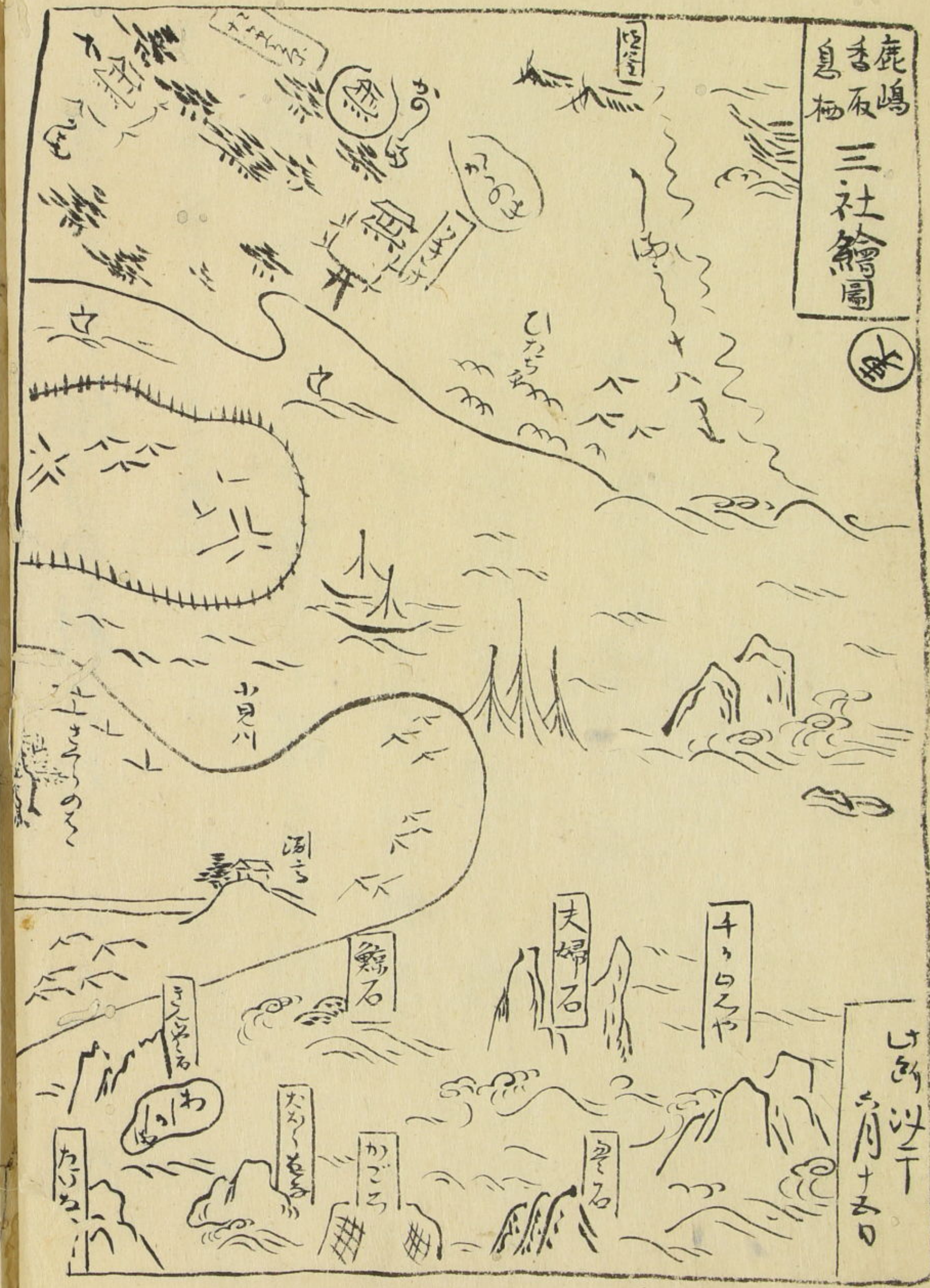
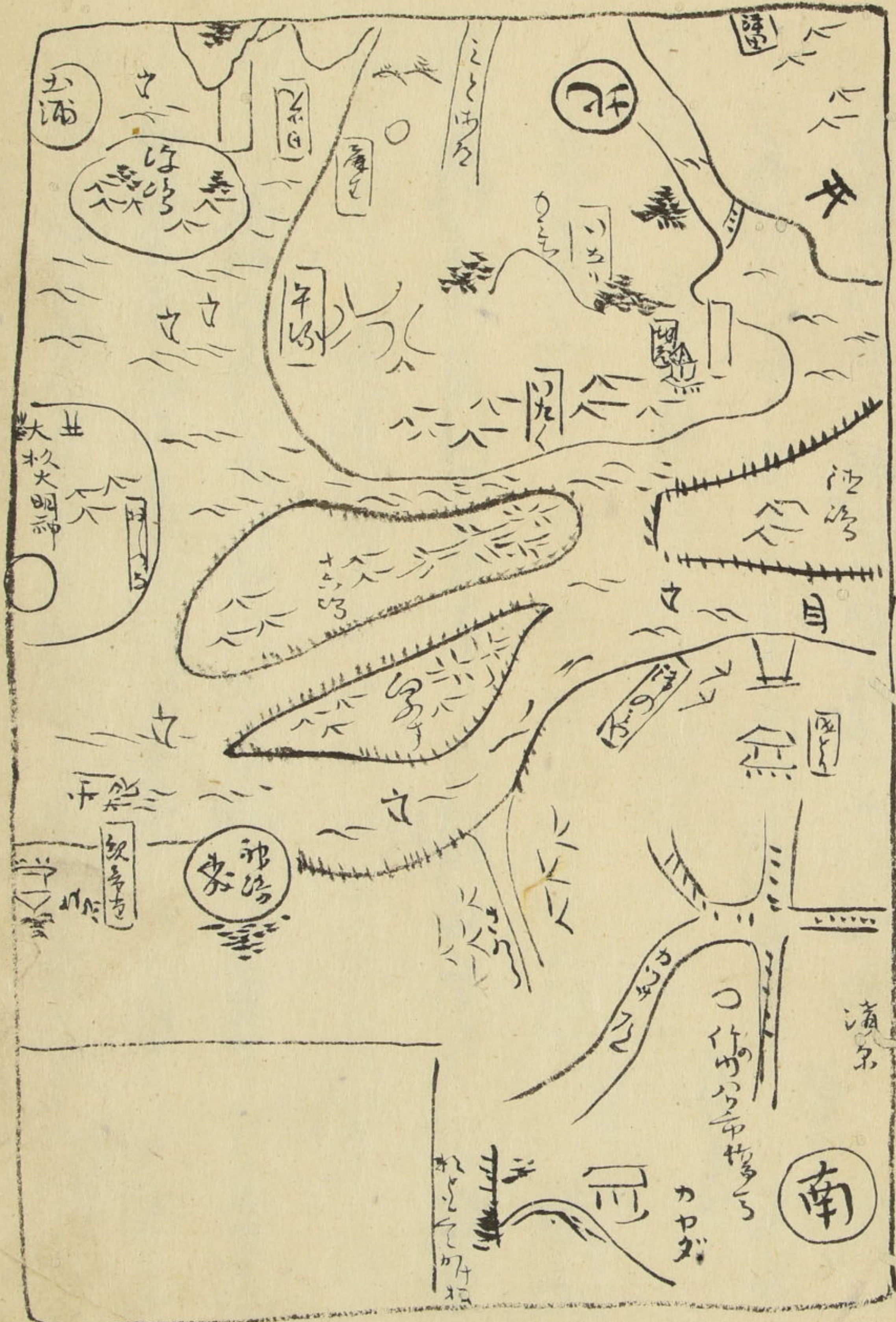
万葉集のうららかな水
万葉集のうららかな水

深きや海への社のねとあり
万葉のうららかな水

山もみちのうららかな水
うららかな水

舟のうららかな水
舟のうららかな水

舟のうららかな水
舟のうららかな水



晴るまゝのまゝの雑作のまゝを流す

聖師

空より一合の粒を落とす

楽二

裁りゆくまゝの編

楽三

おれ

花の月のまゝの流す

紀堂

まのゆくまゝの流す

楽四

美姫

のゆくまゝの流す

紀堂

まのゆくまゝの流す

紀堂

流すまゝの流す

紀堂

まのゆくまゝの流す

楽二

まのゆくまゝの流す

まのゆくまゝの流す

紀堂

楽上

まのゆくまゝの流す

まのゆくまゝの流す

まのゆくまゝの流す

まのゆくまゝの流す

まのゆくまゝの流す

久しうにわたりて山道を越へてふたつ村樹林を
越えしむらひに傳はせたりと云ふの事なりと出立の
今村中より六つ目迄は凡そ常しく東路の人多しと云ふ
に應へて口午よりの様なき今村のらびなりと云ふ
叔本綱と云ふ

花のしほれ物なひいひとふと雲のうら
物林寺や杉の林のうら物なひ
きよらに二里のりりて舟のり物なひ海に
あつてあつちやうと云ふ事なりと云ふ
船のり物なひ海に

くしと云ふ事なりと云ふ

赤いさきと云ふ事なりと云ふ
名のり

舟のり物なひ海に
あつてあつちやうと云ふ事なりと云ふ
船のり物なひ海に

と云ふ事なりと云ふ
名のり
海に

舟のり物なひ海に
あつてあつちやうと云ふ事なりと云ふ
船のり物なひ海に

此らとて思はれどもよ 44
から卑の混傳をさくさむい
瓦の形より入るゆ 遠く
音論をさくさむい
法地平海とくく 歌とく
か代り沖断をさくさむい
大入りのくく 海とく
舟一極を凡とくく 歌とく
口海とくく の歌とく

儿 五 江 魯 儿 五 江 儿

夏美より混を思はれども
糸の混を思はれども
此之艘をさくさむい
船を思はれども
りくくくく 入るゆ
新地を思はれども
いつくく 入るゆ
源を思はれども

五 泊 魯 儿 五 江 魯

ゆふかりのしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき

兒 琴 泊 江 五

通題秋雨感

おちしづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき

巴 琴
萬 歳 村 中
波 江

杉のや甲のおまきの句れき
しづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき
しづかきしづかき

管 笛
柳 兒
名 琴

女之日 平伝 一 札

清き水もあまのこころ
あつたるを思ふらむ

巴歌

く月、時や、月ね、さる古法
月の、さる、こころ、こころ
月、さる、こころ、さる、こころ
月、さる、こころ、さる、こころ
月、さる、こころ、さる、こころ
月、さる、こころ、さる、こころ
月、さる、こころ、さる、こころ

巴歌
柳儿
波江
竹
几
琴
多

うと、候、さ、る、清、水、の、こ、ころ
あ、ま、の、こ、ころ、あ、ま、の、こ、ころ
あ、ま、の、こ、ころ、あ、ま、の、こ、ころ
あ、ま、の、こ、ころ、あ、ま、の、こ、ころ
あ、ま、の、こ、ころ、あ、ま、の、こ、ころ
あ、ま、の、こ、ころ、あ、ま、の、こ、ころ
あ、ま、の、こ、ころ、あ、ま、の、こ、ころ

江
琴
几
江
面
儿
琴
互
江

このまゝに書ししは、
未ししとて、
几

しつゝ

とて

柳

美らき

凡雅

浪江

石

巴

ねの

川

染

小

故

波

信

高

百

小

一

多

金

亭

何

江

此

明

枕

小

ソ

山

サウバを流してまき村むすのりとしを
と舟の内をさかしてなるとしりまを操り

田部村

野田をかく 田さしむるや柳花

柳

舟さし村

匠の舟さし村さし川板の音

巴

端小村

つらつらのねをさしむるさし

全

根村

岩をさしむるさし 根 じり

音

根の舟さしむるさし 柳

柳

茶の舟さしむるさし 八の舟

音

舟さしむるさしむるさしむるさしむるさし

舟さしむるさしむるさしむるさしむるさし

舟さしむるさしむるさしむるさしむるさし

舟さしむるさしむるさしむるさしむるさし

舟さしむるさしむるさしむるさしむるさし

舟さしむるさしむるさしむるさしむるさし

柳

まういそけい一風のふか
月影のうら河と流るこころ
しつてもしつらとふぬ生
凡名もあをよほけいからい
揺れこころと流るこころ
身代ふあれお流る片
さうりりりりりりりりり
ハどし揺感もその心
・た吹かぬのたぬこのまよ

五 玉 五 五 五 五

芥子の心はの流るの定り所
流るよとさるいふその

五 五

そとまよし流る

まよいあやし波音あけし九十九

柳 五

文を新古にゆりい流るの友
とに芥子と流る

五 五

流るよとさるいふその

日よまよの顔と流る

柳 五

懐くけしきあつしとわはる
送るけしき流るしとあふ
志かたの余りお今般のこ
名を侍り又もきしとわはる
也くとりりしと音の怪
清休を良し月ほくしとわはる
思ふも危くはつたをりしと
片後名を書ては文もあふ
深山くしと霧のしとわはる

琴川 兒 琴 子 五 脊 兒 琴

湯くしと何れ深くもわはる
おしきしとわはる
色嬌のあつしとわはる
新をききしとわはる
代編くしとわはる
くしとわはる
くしとわはる
くしとわはる
くしとわはる
くしとわはる

脊 兒 五 琴 川 琴 子 五 脊 兒 琴

花子のふしはねさるゝるこ
見しころの流しとていふも
近はは流しとていふも
流しとていふも一人いふ
顔くまふとていふも
いさういさをたすしとていふも
庚申の年いふも
とらとていふも
流しとていふも

川 琴 三 五 琴 三 玉 川

物紀の何回もかきと
さし西村様もいふも
かきとていふも
流しとていふも
音とていふも
流しとていふも
若也のころの流しとていふも

五 川 三 五 琴 三 玉 川

遊下何ことそとあしあし
つらまきしにほしき湯を
ふねの湯くそきうねる
此世に激りさうと抑りて
白蓮の川にけりけるの外
ソノ世のなき世にさき島
しんをゆきしとあしあし
まなハ教ふてさうねる
わうけまはしハあし

儿 五 五 川 儿 五 琴 儿

入るに後日と探 在
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし
あしあしあしあしあし

儿 脊 儿 琴 五 五 儿 五

神もふしに御をさしうら
群りの松とさかし洲の洞代を
さうさうたれみ歳をさしうら
うす今くわしひのまきさ
此よりさうのみをわしじさ

五 芥 考 考 五

探頭 眼前 八景 地 名

粟山川

尾くうとく山川やさうの音

五 芥

牛の尾

牛尾の中をさしと唯を道とく

巴 琴

唯の音

啼く中や玉啼りて卵の音

雛 音

ね 音

粒をくわはる中やねの音

雛 音

飯 年 稿

娘くわはるくも飯の中稿の月

笠 川

竹 稿

秋の産

観音ハミウラ 又ハミウラ 又ハミウラ

柳

清村

清リ~~~~~ 花をまき人 月夜

柳

十凡房の根を白を敷て白を敷て白を敷て
一瞬と白を敷て白を敷て白を敷て

又~~~~~ 花の帆 柳

柳

柳は花の根を白を敷て白を敷て白を敷て
一瞬と白を敷て白を敷て白を敷て

か~~~~~ 花の帆 柳

柳

泊楓舎橋並月臺

日蓮宗 弘経寺

秋の産

巴夏 秋の産 柳 花の帆 柳
又~~~~~ 花の帆 柳
又~~~~~ 花の帆 柳

柳

柳

又~~~~~ 花の帆 柳

柳

なまのうらみ川ぬ

しらすいふふつづのふり鏡なり

巴歌

る川のゆく

つらに流やそらにむくは髪

巴歌

十凡房のめふあきさ

糸の細くくさくさし 福とくえ

巴歌

難川の刺あわい

百ねてもあぬいとや ま 枕

巴歌

なまのうらみ川ぬ

新流しつづれきまやり入り新

全

流すくあうく前をわく

こもともをちきりて 川とく

一馬

臨岐吟

毎本の丸唐ちてこのあまみえはて
れ文の作道まほくす押よせ
よのそんいさくしをくちあつ
らいてさ旬しゆくかこやん
あひつやせんし境後のまきり
いさくめり取ゆいとれく流す
半かとめり

次へ 四民尾あゆ づれなり

柳八

天幕の以相する侍門謀叛の田畑代のまじり
新屋正勅を治する雄山あちき寺のチー
あまのまじり二きり地へまじりて
うま切成帰一糸のまじりあまのまじり
くまのまじりしりてくまのまじり

お新屋正勅を治する雄山あちき寺のチー
あまのまじり二きり地へまじりて
うま切成帰一糸のまじりあまのまじり
くまのまじりしりてくまのまじり

あまのまじりしりてくまのまじり
くまのまじりしりてくまのまじり
くまのまじりしりてくまのまじり

共八日ゆき井のゆき三つちりたけまじり
ゆき井のゆき三つちりたけまじり

ゆき井のゆき三つちりたけまじり
ゆき井のゆき三つちりたけまじり
ゆき井のゆき三つちりたけまじり

ゆき井のゆき三つちりたけまじり
ゆき井のゆき三つちりたけまじり

ゆき井のゆき三つちりたけまじり
ゆき井のゆき三つちりたけまじり

鑑るしゆくしひのりて候いとて候を
の設くは船定めの心し者か候候念の
若くは念を耳か〜〜〜
未のめ候く候

えうもれるり〜〜〜
板

大歳呼格切音 略定天 隸字一常大歳山通及平通なきなき
の流海ある

千ふより〜〜〜
板

包之ぬきの寂〜〜
と〜〜
板をゆ〜
候〜
〜
〜

〜
〜

〜
柳

庭の掃除は月夜

尺

清くをりて庭の掃除

尺

竹の影をりて庭の掃除

尺

小田も眼鏡をりて庭の掃除

尺

おと根の影をりて庭の掃除

尺

お月子の清くをりて庭の掃除

尺

お梅の影をりて庭の掃除

尺

お沼の影をりて庭の掃除

尺

お梅の影をりて庭の掃除

尺

凡そまゝに包むるは庭の掃除

尺

おと根の影をりて庭の掃除

尺

お梅の影をりて庭の掃除

尺

お沼の影をりて庭の掃除

尺

お梅の影をりて庭の掃除

尺

お沼の影をりて庭の掃除

尺

お梅の影をりて庭の掃除

尺

お沼の影をりて庭の掃除

尺

新田山左衛門

其の

序の新讀し遊や 空の鳥

入江をくわへ 舟のしん

くくくくくくくくくくくく

色くぬねやまのくくく

尾の長くくくくく

名流

吹降きりのりりりりりり

くくくくくくくくくく

羽をくわくくくくく

鳥の鳴るまゝ 柳儿を人
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

九月の文壇をくくく 向井と武く 向井

くくくくくくくくくく

くくくくくくくくくく

の流文をくくくくく

關東一宮

意富比皇大神宮

御建立地左近衛院，勅書或内神也

大津名子細の白とてつく

朝ふ〜わがけは千々々々の月 柳儿

名名、神江降

左船橋祭神木花咲耶姬
或内神也

不暢那流家子村流家子、源左衛門の
首塚あり、松子を回國して細くせ之也

古今類聚常陸國誌田源賴政墓在河内郡龍

嶺地考舊記賴政臨死喚家臣下河邊清恒号

藤三者曰我生不能誅賊死鼻者獄門遺恨無

抱首遁去變姓名為乞人安着於桶自負擔潛

勤清恒以為君主意欲葬於此遂葬之建一小

伺以歲事祭之 下略

二子仙

昭信ちり流中村合まひしよのりく
こまひり流多せしとて今もなり産福の
柿花く者のゆきちりも我孫流流る

流らるれはひや村のゆき

柳儿

柳兒を人の糸持の糸を

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

二日少の海神村の流子雑泡龍を

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

柳兒

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

糸を巻く糸を巻く糸を巻く

多下らんわー吹籠りけし心明き
引いたそと枯木を多しけしけし

秀之
引籠

高野九郎子の印月小曲

お歳暮みかたすまひのし

